

# 長洲町 文化財探訪

《長洲町指定文化財一覽》



NAGASUMACHI

長洲町教育委員会



No.	文化財	文化財 指定時期	校区	頁
1	ふるしようもんじよ 古庄文書（付録「肥後国衆一揆とは」）	H15.5.1	—	5
2	しんどち 新塘（付録「長洲町の形成」）	S51.3.1	長洲 腹赤	7
3	せきもんじよ 関文書（付録「関忠之丞の業績」）	S58.4.26	—	9
4	ながすよめい うた 長洲嫁入り唄（付録「長洲嫁入り唄」）	S57.5.1	—	11
5	みこし 御腰の石	S51.3.1	腹赤	13
6	ほうぎゅうじ そろ 放牛地藏	S51.3.1	腹赤	14
7	せいげんじてんまんぐう かぐら 清源寺天満宮の神楽	S51.3.1	腹赤	15
8	はらかてんまんぐう かぐら がく 腹赤天満宮の神楽・楽	S51.3.1	腹赤	16
9	たちばなむねしげごうふじん はか 立花宗茂公夫人の墓（ぼたもちさん） （付録「立花家と間千代姫」）	S56.5.1	腹赤	17
10	おりぢ 折地のカイカイ人形（付録「カイカイ人形」）	S51.3.1	六栄	19
11	ろくえい 六栄小ケヤキ	S61.3.1	六栄	21
12	にのみやはちまんぐう わにぐち 二宮八幡宮の鰐口	H15.5.1	清里	22
13	うめだてんまんぐうたまふじくん 梅田天満宮玉藤群	S52.12.5	清里	23
14	ろくじぞうせきどう 六地藏石幢	S51.3.1	長洲	24
15	し おうじじんじゃ せきぞうこまいぬ 四王子神社の石造狛犬 （付録「四王子神社」）	H20.4.4	長洲	25
16	こぶんかいそうのひ 古墳改葬之碑（付録「島原大変・肥後迷惑」）	S51.3.1	長洲	27
17	かいなんひ 海難碑（付録「天草遭難者の碑」）	S51.3.1	長洲	29
18	きゅうえんたいなら そうなんしゃのひ 救援隊並びに遭難者之碑	S51.3.1	長洲	31
19	めいとくひ 明德碑	S51.3.1	長洲	32
20	はまゆみさい まと 破魔弓祭（的ばかい）	S51.3.1	長洲	33

※※※ 発刊にあたって ※※※

私たちの郷土には、先人達の残してくれた貴重な文化遺産がたくさんあります。私たちは、これらの郷土の財産を後世に引き継いで行く責任を持っています。

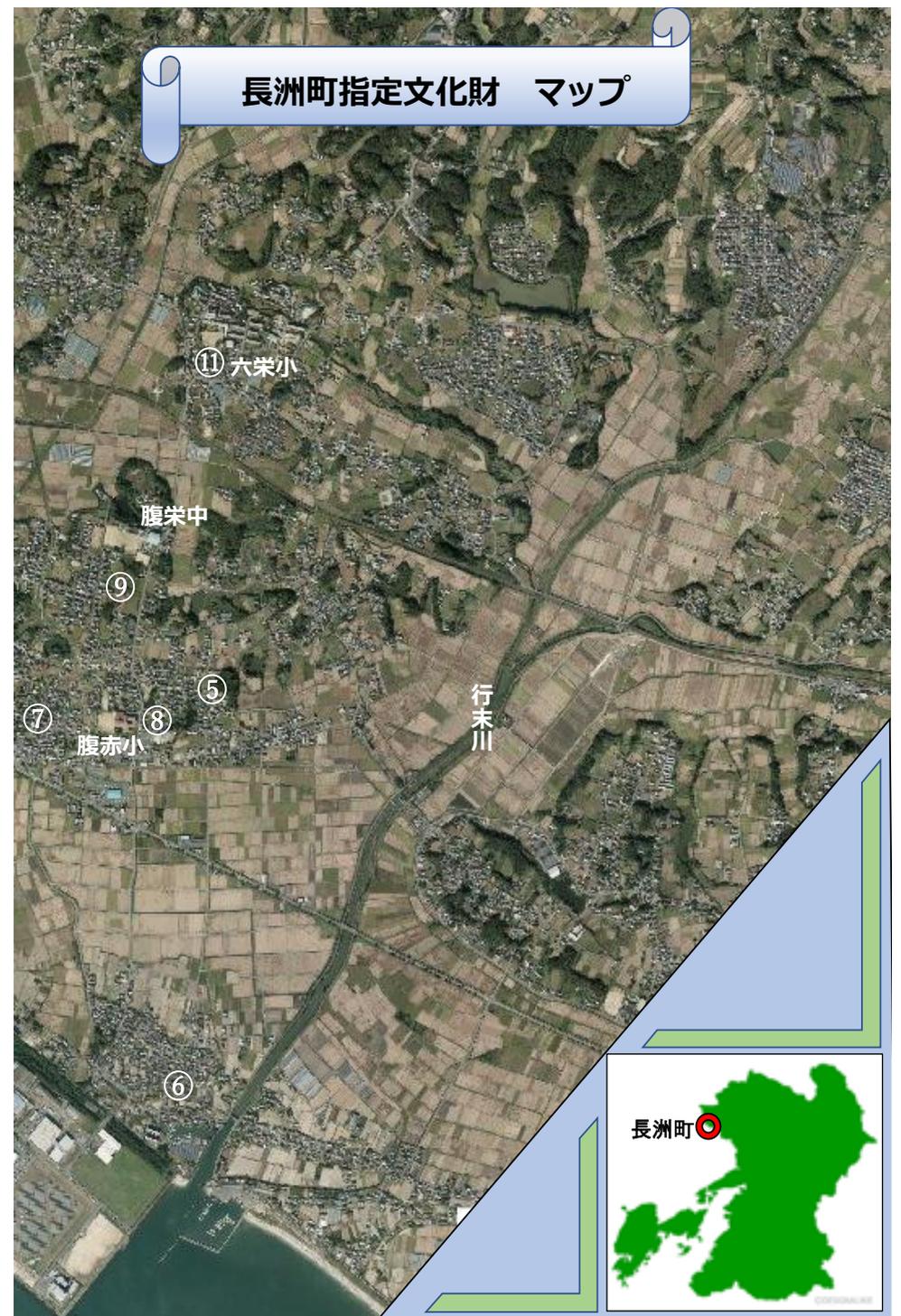
まずは、身近にあるこれら文化財の由来や文化的な価値を知ることが必要です。このハンドブックは、皆さんに郷土の文化財に興味を持っていただくきっかけとなることを願って作成しました。

これを通して、郷土の遺産が後世に引き継がれて行く一助となることを願っています。

内容に不備なところや誤りがあれば、ぜひお聞かせください。

令和 2年11月

長洲町文化財保護委員  
委員長 山本 孝範



ひごくにしゅういっき  
肥後国衆一揆とは

全文は  
右QRコードで



熊本県公式観光サイト「くまもっと」より

肥後国衆一揆とは、加藤清正が肥後に入国する前年、肥後北東部の国衆（地侍）が領主佐々成政に対して起こした大規模な一揆です。

■ 肥後の国衆一揆はなぜ起きたか

戦国時代末期の天正15年(1587)の夏から、半年間肥後北東部の国衆が中心になって、領主の佐々成政に対して、大規模な一揆を起こしました。これがいわゆる国衆一揆です。

国衆とは、地侍ともいい、その土地を所有し民政・軍政を担当していた戦国領主のこと。肥後には、50数人の国衆がいて、阿蘇・上益城を社領とする阿蘇大宮司家、菊池・山鹿・鹿本を支配した隈部親永、山本郡（現在の植木町と鹿本町）の内空閑鎮房、人吉・球磨の相良長每が有力でした。



佐々成政

その頃、全国をほぼ平定した豊臣秀吉は、朝鮮からさらに明国への出兵を考えるようになり、肥後をその兵站（へいたん）基地にするために、佐々成政を肥後の領主に任命。肥後は、難治の国であったため、かつて越中（現富山県）を治めていた成政を抜擢したので。秀吉は、兵力を維持するための兵糧米を確保するために、諸大名に「太閤検地」を実施させます。（中略）

佐々成政は、隈本城（古城）に国衆たちを呼び集め、最も有力だった隈部親永から検地を行なう旨を告げました。国衆たちは、それ以前に秀吉から「本領安堵状」をもらって領地は保証されていたはずでした。隈部親永も国衆は、検地に応じようとせず、怒って居城に帰り、ここに国衆一揆が勃発したのです。

■ 山鹿の城村城、和仁の田中城での攻防

真っ先に兵を挙げたのは、6万石以上の大名に匹敵する勢力を持っていた隈部親永でした。佐々成政が、隈部氏の居城の菊池城を攻めると菊池城はあえなく落城。隈部親永は、息子の親泰とともに山鹿の城村城に立て籠もります。（後略）

■ 肥後中世の終焉、そして近世へ

1588年10月1日から京都で大茶会を催していた秀吉は、急ぎ茶会をとりやめ、肥後国衆一揆勢に対して、九州・四国各藩から約2万人の軍勢を送り込みます。隈部氏をはじめ武士農民が1万8千人立て籠った城村城。さらに1万数千人が立て籠った田中城の攻防は、実に半年にわたって続きました。秀吉は「国が荒れ果てても、ことごとく成敗せよ」と檄を飛ばし、徹底的に弾圧しました。そして、ついに田中城は落城し、和仁一族は討滅され、城村城は停戦開城。隈部一族は、翌年になって殺されました。（後略）



山鹿市菊鹿町のあんずの丘  
に立つ隈部親永像



【検地帳】



【覚書】

ふるしようもんじよ  
古庄文書  
ふるしようもんじよ  
「古庄文書」とは、安  
土桃山時代(1573年)  
から江戸時代初期(16  
44年)までの旧腹赤村  
の検地帳と江戸時代後  
期の庄屋文書等のこと  
です。  
特に天正の検地帳は、  
「肥後国衆一揆」後の  
天正16年(1588年)  
に実施された公検地の  
検地帳と考えられます。  
後に行われた加藤清正  
による検地でもこれが  
使われました。

検知  
領主が農民の田畑の面  
積や収穫量を調査する  
こと。また、その内容  
を書き留めておくもの  
を検地帳という。  
公検地  
幕府が行う田畑の調査  
のこと。

また、この文書には、  
柳川より一人の女性が  
腹赤の阿弥陀寺を訪れ、  
その後亡くなられたと  
の記述があり、この女性  
が立花闇千代のことでは  
ないかと言われている。  
(17・18頁を参照。)

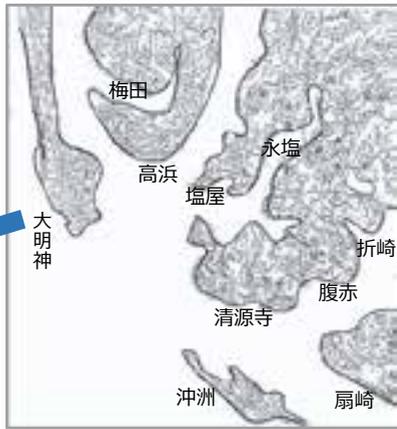
# 長洲町の形成

干拓・埋立とともに拡大する長洲町

■室町・加藤清正時代(1588年)の地形



■加藤清正以前の地形



■江戸・加藤忠広時代(1626年)の地形



■江戸・細川時代(1664年)の地形



1849年頃関忠之丞が川の流れを扇崎～新川へ改修

■現在の地形



【現在の新塘】



【新塘の海岸にはこのような波止(ハト)が築かれていた】



【新塘の一角に建てられた指定文化財の記念碑】

## 新塘

塘とは、防潮堤のことです。新塘は、江戸時代の初期、寛文4年(1664年)に工事を始め、長い年月をかけて長洲町大明神と清源寺を結び海岸に作られた堤防です。

この時に築かれた防潮堤は、全長1880m、幅は3.6～5.6mでした。その後、これを石垣で補強し、その途中に2基の水門を築き『新塘』として完成したのは、延宝

4年(1676年)と言われています。

金魚と鯉の郷の交差点を東に曲がり、800m程行った所に2基の水門がありました。土木建設機械などのない時代、多額の費用と多くの地元民の労力により作られ、先人たちの偉大さが偲ばれます。

この堤防によって仕切られた広い新地は、塩田や田畑として利用され、今日の長洲町の原風景となっています。

せきちゅうのじょう ぎょうせき  
関 忠之丞の業績

■ 長洲出身の唯一の惣庄屋

関忠之允は、惣庄屋の中で唯一、長洲出身の人です。「惣庄屋」とは、江戸時代、地方行政にあたった村役人の最上位の者で、十数ヶ村をまとめて支配し、領主からの法令の伝達、年貢諸役の割付、管内村々の争い事の調整にあたりました。今で云うところの「市長」に相当します。

関忠之允は、文化元年（1804）に関忠兵衛の次男として生まれました。天保7年（1836）5月、32歳で荒尾手永の惣庄屋当分を命ぜられ、5年後の天保12年5月、惣庄屋本役に任じられました。その後、天保14年、小田手永に転勤となり、約2年間勤めた後、弘化3年（1846）に、玉名郡の中心部高瀬町周辺一帯の村々を統括する坂下手永の惣庄屋に任じられました。そして、万延元年（1860）、56歳で亡くなりました。関忠之允の墓碑が、腹赤新町の高台の一角に建てられています。

■ 関 忠之允の業績

関忠之允の業績の中で、特に治水、利水土木工事、難民救済への尽力等は顕著です。「玉名郡誌」には、池の造成、井樋の増設、村の零落救済、財政再建など32項目にわたり関忠之允の功績が記載されています。



腹赤新町にある  
関忠之允の墓碑

● 浮田大池新堀（大池づくり）（1853年）

浮田大池は、文化13年に一つだけ掘られたが海岸に近い位置の村々はその恩恵に浴しなかった為、池の上と下に二つの池を造成した。浮田大池の畔には、その功績を讃える石碑が建てられている。

● 行末川の改修（1849年）

行末川の流れは、途中で折れ曲がり水害の常襲地帯であった。そこで関忠之允は、川の流れをまっすぐにし（8頁の左下地図参照）さらに川の出口を整備して船が出入りできるようにした。

● 塘（古塘、名切塘、塩屋塘）の石造りへ改修

塘にかかる橋は、加藤清正時代は木造であった為、度々修理を必要としていた。この為、関忠之允はこれを石橋に改修した。更に上流の田に必要な水を確保するために石の樋門を造った。



浮田大池の畔に  
ある 功績の碑

● 腹赤村の農民救済

時代は不明であるが、腹赤村の作物の不作が長く続き農民は極度に困窮した。そこで関忠之允は、農民が売ったり質に入れた田畑を無料で返却させるなどして農民を困窮から救った。

● 烏牟田井樋（からすむたいび）

荒尾の池黒池を水源とする浦川は、古塘の井樋で止め水田の水として使われていたが、大雨の時は排水がままならず水田の冠水が頻発した。そこで、関忠之允は浦川に現在の長洲中学校から長洲斎苑の方を通り海に流れる水路を新たに掘った。



【宮本治人氏寄贈の文書目録】

関 文 書

「関文書」は、江戸時代末期の文政年間（1818年〜1831年）から明治初期までの約70年間に記された行政資料と手記です。

特に荒尾手永・坂下手永の惣庄屋を務めた関忠之丞の役職中に記録された文書が多く、約200点余りが現存しています。これらは、関忠之丞から数えて四代目の関保久氏から長洲町教育委員会へ寄贈されたものです。その後、地元の宮本治人氏により文書を整理した一覧表が作成されました。

文書の一部は郷土史家の研究により解読されていますが、まだ解読

されていない文書が数多くあり、今後、更にその解読・研究が進められることが望まれます。

手記

個人の体験・感想などを書き残したものだ。

手永

郡と村の中間の行政単位の。

惣庄屋

江戸時代、地方行政の村役人の最上位の者。

# 長洲嫁入り唄



動画は  
上記QRコードで

- 一 親は鈍<sup>どん</sup>なもの 柴茶<sup>しばちや</sup>に迷<sup>まよ</sup>て ノンシコラ  
知らぬ<sup>たむら</sup>他村に 娘<sup>むすめ</sup>やる  
アラヨカノンシノンシ ホッホヨカヨカ  
ユウナカバッテン ドオシウカイ  
カンネンサーイ カンネンサーイ
- 二 親と親との 約束<sup>やくそく</sup>ならば ノンシコラ  
行か<sup>い</sup>じゃなるまい 泣<sup>な</sup>く泣<sup>な</sup>くも  
アラヨカノンシノンシ ホッホヨカヨカ  
ユウナカバッテン ドオシウカイ  
カンネンサーイ カンネンサーイ
- 三 嫁<sup>よめ</sup>と名のつ<sup>あ</sup>きや 浅黄染<sup>あさぎぞめ</sup>いやよ ノンシコラ  
今<sup>いま</sup>のはやりの 茶染<sup>ちやぞめ</sup>の裾<sup>すそ</sup>模様<sup>もよう</sup>  
アラヨカノンシノンシ ホッホヨカヨカ  
ユウナカバッテン ドオシウカイ  
カンネンサーイ カンネンサーイ
- 四 嫁<sup>よめ</sup>ごな<sup>ご</sup>って<sup>ご</sup>から 泣<sup>な</sup>くこ<sup>こ</sup>ち<sup>ち</sup>や<sup>や</sup>ならぬ ノンシコラ  
泣<sup>な</sup>けは<sup>は</sup>婿<sup>むこ</sup>どん<sup>どん</sup>が 世<sup>よ</sup>話<sup>わ</sup>やか<sup>か</sup>す  
アラヨカノンシノンシ ホッホヨカヨカ  
ユウナカバッテン ドオシウカイ  
カンネンサーイ カンネンサーイ
- 五 船<sup>ふね</sup>は出<sup>い</sup>て行<sup>い</sup>く 帆<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>けて走<sup>は</sup>る ノンシコラ  
茶<sup>ちや</sup>屋<sup>や</sup>の娘<sup>むすめ</sup>が 出<sup>い</sup>て招<sup>ま</sup>く  
アラヨカノンシノンシ ホッホヨカヨカ  
ユウナカバッテン ドオシウカイ  
カンネンサーイ カンネンサーイ
- 六 あなた百<sup>ひゃく</sup>まで わしは九<sup>く</sup>十<sup>じゅう</sup>九<sup>く</sup>まで ノンシコラ  
共<sup>とも</sup>に白<sup>しろ</sup>髪<sup>かみ</sup>の は<sup>は</sup>え<sup>え</sup>る<sup>る</sup>まで  
アラヨカノンシノンシ ホッホヨカヨカ  
ユウナカバッテン ドオシウカイ  
カンネンサーイ カンネンサーイ

## ◆◆ 語句の説明 ◆◆

- 一
  - 鈍(どん)⇒おろか、鈍感
  - 柴茶(しばちや)⇒お嫁さんの実家に贈られる結納の品のお茶
  - 迷て⇒迷って
  - ノンシコラ⇒進物に供える熨斗(のし)からとった唄の囃子
  - ユウナカバッテン ドオシウカイ⇒「器量はよくないけどよろしくお願ひします」というお嫁さん側が謙遜して送り出す囃子ことば
  - カンネンサーイ⇒「勘弁してください」「許してください」という囃子ことば
- 二
  - 浅黄染(あさぎぞめ)⇒当時は時代遅れで地味な染色の着物
  - 茶染の裾模様(ちやぞめのすそもよう)⇒着物の裾に美しい染色を使った当時流行の着物
- 三
  - 婿(むこ)どん⇒おむこさん
  - 世話やかす⇒心配される
- 四
  - 茶屋の娘⇒茶店(休息所)の若い女店員
- 五
  - あなた⇒お婿さん
  - わし⇒わたし(お嫁さん)



【昭和 32 年頃の婚礼風景】



【文化祭で披露される】



【近年行われた再現風景】

ながすよめい うた  
**長洲嫁入り唄**  
この嫁入り唄は「のんしこら」の唄名で、民謡界では「熊本民謡」として全国的に知られています。  
長洲では、江戸時代の初期(1600年)頃から昭和10年(1935年)頃まで、婚礼の時に花嫁の友人・知人がこの嫁入り唄を歌い、手拍子で囃してながら家の門口から花嫁を励まし、見送るという風習が続いていました。このため、いつ

囃し立て  
盛り上げること。  
門口  
家の出入り口付近。

の間にか「長洲嫁入り唄」と呼ばれるようになり  
ました。  
現在、この嫁入り唄を後世に残そうと「長洲嫁入り唄保存会」が設けられ、夏祭り、町文化祭成人式などの場で披露されています。



【放牛地藏】



この部分は、地藏建立当初あったものが、『島原大變・肥後迷惑』の津波により、消失したと伝えられています。

### 放牛地藏

ほうぎゅうじぞう

江戸時代の初期、貞享3年(1686年)、

熊本の鍛冶屋町に七左衛門という鍛冶職人が

いました。ある日、二人の息子が家の前でけん

かをしていました。いつまでたっても止めないので、父親の七左衛門は

怒り、子どもたちに火吹き竹を投げつけました。

しかし、火吹き竹は、子どもたちではなく、ちよ

うど家の前を通りかかった大屋野源左衛門と

いう武士の額に当たっ

てしまいました。それに

怒った源左衛門は、逃げ

ようとすする七左衛門を

無礼打ち(斬捨て)に

しました。その後、子ども

の一人が僧となって『放

牛』と名乗り、父を殺して

しまったのは自分だと、罪を懺悔するとともに、人々に心の安らぎを

与えるため、肥後の各地に118体の石仏を建てました。これが『放牛地藏』と言われ、その76体目が長洲町(上沖洲)にあります。



【御腰の石】



【高さ94cm、底幅1m】



【竹林の中にある御腰の石】

### 御腰の石

みこし

御腰の石は、全国に数多く残っている景行天皇の伝説に関する文化財の一つです。日本書紀によると、景行天皇は

朝廷に従わない熊襲を征伐した後、八代・島原半島を経て長渚(現在の

長洲)の浜に着かれ、腹赤の深田浦でお休みに

なられたそうです。その時、腰を掛けられたのが、この石だと言われています。しかし、この石の正面には、周養という

仏師による地藏菩薩が彫っており、室町時代末期の享祿2年(1529年)に建てられた逆修碑であることがわかり

ます。逆修碑とは、生きて

いるうちに碑を建て、死後の冥福を祈るためのものですが、誰の逆修碑かは不明です。

日本書紀

奈良時代に成立した日本の歴史書。

景行天皇

日本の第12代天皇。

熊襲

古代、南九州に住む人々。



【迫力ある神楽 鬼神の舞】



【姫 楽】



【子ども楽】

腹赤天満宮の神楽は、明治20年（1887年）玉名市から伝えられたと言われています。神楽は、正月、5月、9月の25日に奉納されています。舞は、初剣に始まり、7つの舞へと進み有名な鬼神の舞へと続きます。当日は、すべての灯火を消し、真つ闇の中で、唯一の蝋燭の光だけで舞います。鬼神

### の神楽・楽

#### 腹赤天満宮

の舞では、迫力ある鬼神の面と、手に持つ刀に蝋燭の光が映えて、神々しい雰囲気があります。その後も舞は進み、神主と鬼神との問答が行われ鬼神の舞は終わりとなり、最後に地堅の舞で神楽も終わります。また、かつて腹赤天満宮では、神楽・楽とともに花火も奉納されましたが、今では花火はなくなり、神楽と楽だけが引き継がれています。



【二剣の舞】



【子ども神楽】

清源寺天満宮の神楽は、上沖洲の名石神社から習い受け継いできたものです。この名石神社の神楽は、明治18年（1885年）玉名市に鎮座する迫間八幡宮から上沖洲に伝えられたものです。清源寺天満宮の神楽は、無病息災、家内安全、五穀豊穡の願いと、神への感謝を込め、地元の子供から大人まで10組

#### 清源寺天満宮の神楽

が神楽舞を神前に奉納するものです。この神楽は、現在、区内神社や野原八幡宮、名石神社で神楽奉納として舞われ、また町の行事の中でも積極的に披露されています。また、神楽に親しむことを目的とした出張講座として、腹赤小学校の郷土史学習の中でも披露されています。

全文は  
右QRコードで



## 立花家十七代が語る「立花宗茂と柳川」より

### ■ 立花宗茂公

立花宗茂は、永禄10年(1567)、大友家の将高橋紹運の長子として生まれました。戸次道雪に望まれ、養嗣子に迎えられたのは天正9年(1581)のこと。当時、道雪は、紹運と共に筑前筑後の各地で反大友勢力と戦っていた為、宗茂は立花城の守備が任されていたようです。九州の統一をもくろむ島津氏の脅威が南から迫り(中略)結局、秀吉が九州を平定しますが、この結果、立花家は大友家から独立し、筑後柳川に新たな領地を与えられることになったのです。

慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦に際して、宗茂は西軍(豊臣方)につきます。敗戦の報に接した宗茂は、大坂城へ入城しますが、結局柳川へ帰ります。柳川では、鍋島直茂や加藤清正と対峙し、鍋島勢とは八院付近で戦いますが、結局、清正の要請を受け入れて開城することになります。妻閻千代や他の家臣の多くは、加藤清正のもとへ預けられますが、宗茂自身は、少数の家臣とともに上洛して、徳川家康の許しを得るのを待つこととなります。

(中略)その後、宗茂は旧領に復帰することとなったのです。



立花宗茂

宗茂は、寛永6年(1629)以後、次第に権限を忠茂へと移譲していきます。しかし、寛永14年の島原の乱では、將軍家光の命により下向き戦闘に参加しています。そして、寛永19年11月25日、享年67歳にて没しています。

### ■ 閻千代姫

立花宗茂の正室であった「光照院」、通称閻千代は戸次道雪の娘として誕生しました。(中略)閻千代の誕生は、永禄12年(1569)8月13日とされています。

元龜2年(1571)7月、大友宗麟は、道雪を城督として筑前の要衝立花城に入ります。天正3年(1575)、大友宗麟・義統は、男子の無かった道雪に対し、戸次鎮連子息の内からしかるべき一人を養子として「立花城」の家督を譲るように勧めます。しかしながら、道雪はこの勧めを入れず同年5月28日、数え年僅か七歳の娘閻千代に立花城の城督・城領・諸道具の一切を譲ってしまいます。名目上とはいえ、ここに幼少の女城主が誕生したことになります。(中略)



閻千代姫

閻千代と宗茂が婚儀をあげた頃の道雪は、宗茂の実父高橋紹運とともに筑前筑後の各地で反大友勢力と戦っていました。秀吉の九州平定により、立花家は大友家から独立し、筑後柳川に新たな領地を与えられることとなります。閻千代は、幼少の頃から慣れ親しんだ立花城に別れを告げなければなりません。

関ヶ原の合戦によって立花家が改易されると、閻千代も他の家臣共々加藤清正のもとに身を寄せ、肥後領内玉名郡腹赤村に居住していました。しかしながら、関ヶ原の合戦から2年後の慶長7年(1602)10月17日、同村において死去します。享年34歳と伝えられ、法名は「光照院殿泉參良清大禪尼」と称します。元和6年(1620)、柳川再封を果たした立花宗茂は、城下に良清寺を建立し閻千代の菩提を弔いました。



【立花宗茂公夫人の墓】

たちばなむねしげこうふじん  
立花宗茂公夫人の墓

(ぼたもちさん)

この墓は、筑後柳川藩(現福岡県柳川市)藩主立花宗茂の妻閻千代のお墓です。通称『ぼたもちさん』と呼ばれています。



【北口阿弥陀堂】

立花宗茂は、豊臣秀吉の時代に柳川藩32万石の藩主を命ぜられました。たが、慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦いで石田三成側に味方して敗れ、領地を没収されてしまいました。しかし、親交の深かった加藤清正のとりなしで命は助けられ、一時高瀬(現玉名市)に滞在し、その後熊本へ移り住みます。このころ妻の閻千代は腹赤に移り住み、母宝樹院と共に3年間この腹赤の地で暮らします。

たちばなむねしげとよとみひでよし  
立花宗茂は、豊臣秀吉の時代に柳川藩32万石の藩主を命ぜられました。たが、慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦いで石田三成側に味方して敗れ、領地を没収されてしまいました。しかし、親交の深かった加藤清正のとりなしで命は助けられ、一時高瀬(現玉名市)に滞在し、その後熊本へ移り住みます。このころ妻の閻千代は腹赤に移り住み、母宝樹院と共に3年間この腹赤の地で暮らします。

そして、慶長7年(1602年)34歳で亡くなりました。一方、宗茂は元和6年(1620年)旧領の柳川藩を徳川秀忠より再び与えられ、藩主に返り咲きました。そして寛永11年(1634年)、閻千代を偲んで墓碑を作らせています。

# カイカイ人形唄

動画は右記QRコードで



## 〈本調子〉

### カイカイ人形唄

(熊本県玉名郡長洲町を折地(字折地))

へおやのななんとしよぞえ

あゝいたかつた膝頭をすりむいて

憎いとび入りあぶらげ候

泣くなよい子じやこんな物やろぞ

お月さんな後つ十三七つ

まだ年ーやいかぬやまだしに

色チントチテンが白くて頬が丸くて気がきくならは

横丁のチントチテンごもん通りや野暮でなし

わたしやどうでもこうでもあの人はかりは

あきらめられねよ じやによつて

讃岐の金比羅チントチテンに

ご願でもかけましょか

トツツルシヤン

へ 仇口に花々ええさそぬ生娘を

枝なりぶりをぶつ切られ花を散らせて

がたがたされてがっくりそっくりと

みどり兜をおろして

これからは

あやす片手に子守唄



## 折地のカイカイ人形

折地カイカイ人形の

「カイカイ」とは、「おんぶする」という意味で

す。当地の方言では、「からう」とも言います。

これは、景行天皇が来た時に、「村人」が藁人形を背負って、天皇を歓迎したことに始まったとも言われています。

また、当時よりこの地区で行われていた雨乞い踊りであったとも言われています。人形が

人間をおんぶして踊る姿が大変面白く変わった踊りです。

今日、地元では「折地カイカイ人形保存会」を作り、その保存・継承に取り組み、町文化祭などで披露しています。

景行天皇  
日本の第12代天皇。

【金銅製鰐口 横 直径 24 cm】



【鰐口】

九州肥後国玉名郡小代野原庄菅濱村  
二宮大明神御奉前

奉寄進鰐口

出覽永其矣末曆八月廿日

庄屋本由助右衛門

白 敬

【鰐口の表面に刻まれた文字】

## 六栄小ケヤキ

六栄小ケヤキは、六栄小学校の校庭の南東にあり、六栄小校区のシンボルツリーとなっています。



【六栄小ケヤキ】

このケヤキは、箒立の姿をした大木で、明治の末(1910年)ごろ「長野蚕糸専門学校」



【数十年前の六栄小学校】



【なんかた・ついじ広場の兄弟樹】

の教授であった永方区出身の築地宜雄氏の寄贈によって長野県より移植されたものです。また、築地宜雄氏の娘の築地正子氏は、有名な詩人であり「なんかた・ついじ広場」は、この築地家から寄贈されたものです。

六栄小ケヤキと同時に移植された「兄弟樹」のケヤキの木が、永方区の築地家跡地に造られた「なんかた・ついじ広場」に残っています。

## 二宮八幡宮の鰐口

二宮八幡宮の鰐口は、仏具の一種で金属製の丸型の形状をした、参拝者がたたきならす器具のことです。

長洲町史によると寛永20年(1643年)8

月吉日、高浜村の庄屋本田助右衛門が、寄進したもので当時は、神仏習合の考えで奉納されたものと思われる。

二宮八幡宮は、旧高浜村の村社で、肥後の国司、

尾藤小 卿肥後守隆房が肥後の国に建立した内の一社と言われている。その後、宝治年間(1247年〜1249年)に小代氏が下向してからは、野原八幡宮を鎮守本社、高浜の八幡宮を二宮と序列化してうやまいました。現在、二宮八幡宮は長洲町建浜区と荒尾市高浜区の氏神様で、毎年10月11日が祭日となっています。

### 下向

都から地方に行くこと。



【高1.6m、周囲2.8m】



【左が六地藏石幢、右が明徳碑】

ろくじぞうせきどう  
**六地藏石幢**  
 ろくじぞうせきどう  
 六地藏石幢は、享保8年（1723年）当時町内に住んでいた庄屋久兵衛という人を中心に、町の人達が建てたものと言われています。

ろくじぞうせきどう  
 六地藏石幢は、六つの面に地蔵が彫られた六面石幢です。六面石幢としては、町内唯一のもので、六つの面は六道と言われ、それぞれ『地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道』の世界を指しています。

### 石幢

六角または八角の石柱からなる石塔。



【近年、樹勢を盛り返し再び花を咲かせている】



【梅田天満宮】

うめだ だんまんぐう ぎんざ ぎんざ  
**梅田天満宮玉藤群**  
 藤の木は、他の樹木と異なり年齢を有しないため正確な樹齢の測定はできません。

しかし、宝暦6年（1756年）天満宮の社殿が建てられたころには、すでに植えられていたことが古文書に記してあります。（天満宮の由緒については、旧清里村村長島田一馬氏保存の文書に記録あり。）

また、明治の始め（1868年）ころには、すでに今以上に茂つてい

たとのことで、樹齢が200年以上に及ぶものと推定されます。

玉藤群の名称由来は、垂れ下がった花房の下部がつぶ状になり、花の下に玉を並べた形となり、この名が付けられたとも言われています。

また、花の満開時には地域の子供達が集まり「玉藤」を投げ合つて「玉藤合戦」をしていたとも言われていますが現在は、玉藤の形状はありません。

ろくじぞうせきどう  
 この六地藏石幢は、六面にそれぞれ地蔵様が彫られ、人々を救う姿を表したものです。

天道から時計回りに  
 『オン・カカカ・ビスン  
 マエイ・ソワカ（聖音・地蔵菩薩の種子を三回唱え・稀有なる御方よ）』  
 と言ってお参りします。

しおうじじんじや  
四王子神社

祭神 : 日本武尊 外三神 (景行天皇の四王子)  
 例祭日 : 5月15、16日 10月15、16日  
 創建 : 永暦元年 (1160) 9月15日  
 社殿 : 権現造 本殿42.3㎡ 幣殿30㎡ 拝殿48㎡

■ 四王子神社の由来 『長洲町史』より抜粋

「馬場文書」の旧事記に、「四王子宮は、景行天皇の王子四人を祀り奉りしなり。右宮之正月元朝に鏡餅三ツ 先祖より毎年上げ来り。 (以下略)」とある。一説には、筑前の国四王寺嶽より御来臨ましますと申伝へなり。大宰府より半里程北に白王子村あり御笠郡の内なり。此の村の氏神の額に白王子宮とあり云々 (以下略)。以上のことから氏は、四王子宮の神は、筑前四王寺嶽から来現されたものという。

この四王寺嶽は、通称大野山と言い古代大宰府防衛の拠点であって、山全体が古代朝鮮式の山城である。この大野城の仏法守護の寺が、四王寺であることから四王寺嶽と呼ぶ。四王寺のいわれは、天智2年(663)白村江の戦で大敗し、新羅の来襲をおそれて、これを調伏(祈り伏せること)のため、宝亀5年(774)四天王を祀った。それで四王院また四王寺と呼ぶ。この四王寺嶽の最高峰王城山(後大城山と改む)に王城大明神が祀られていたという。

王城大明神は、天智4年(665)大野城築城に際して、現在地、太宰府市通古賀に遷座されたといわれるが、今でも四王寺嶽の鎮守神である。太宰府天満宮文化研究所蔵の、『王城大明神縁起書』によれば、祭神の神名も書いてあり、まむし退除の神という。同研究所の話では、四王寺嶽には王城神社の外に社はなかったとのことである。

当四王子神社では、永暦元年(1160)の来現から年を経て、社殿遷座の議が起り、社司が弓を引いて放った矢が立つた現在の地に遷座されたという説がよい。

宝暦9年(1759)、長洲町在住の細川藩士松尾氏が、四王子宮の敷地免租の許を得て、社殿を改築され九曜の紋を戴いて奉納されたという。(『長洲物語』清住尊義著)

また四王子宮は、蝮(ひらくち)退除の神としても有名である。鹿本郡鹿史町霜野北谷の日吉山王宮に「ヒラクチ神さん」という石祠があり、土地の人は、長洲の「シオジンさん」の分霊だという。また先年発行された植木町史には、ヒラクチ神の石祠が各地に点在しているが、「長洲四王子宮の分霊で、筑前四王寺嶽→長洲→植木へと波及したものと考えられる」と書いてあるし、北部町史にも蝮神のことが書いてある。玉名市梅林地区などでは、毎年5月の長洲祭に、近所の分も頼まれた人達が何人も守砂を戴きに来ると聞く。



四王子神社で販売されているへび除けの砂



金魚と鯉の郷の一角に位置する四王子神社発祥地



【四王子神社】



しおうじじんじや  
四王子神社の  
石造狛犬

四王子神社の石造狛犬は、材質が砂岩でできています。左右の区別が明瞭でなく45cm程の小さな作りで、銘文もなく作者は不明です。また、その造形から江戸初期に造られた「肥前狛犬」に類するものと思われまます。「肥前狛犬」とは、その名称のとおり、肥前地方(現在の佐賀県北部)に類するものと思われまます。

唐津市(西部)を中心にしたがった狛犬です。熊本県内では、南関町の今村神社、荒尾市の平山神社、玉名市の伝ひだりやまこふん左山古墳、山鹿市の松尾神社及び清潭寺、上田草市の湯島諏訪神社などで確認されており、当時の石製品の交流の一端をうかがい知ることができます。

狛犬

神社の社殿の前などに置かれる一對の獅子(し)や犬に似たものの像。

■島原大変・肥後迷惑

雲仙普賢岳は、今から229年前、寛政3年（1791）から4年にかけて、溶岩の流出を伴う大きな火山活動を起こしました。その時、噴火活動の最終局面とみられる寛政4年4月1日の夕刻に、島原城下付近を中心とする強い地震が発生しました。雲仙岳東側の島原の背後には、眉山と呼ばれる標高818mの山があり、この山は粘性の高い石英安山岩質の溶岩を噴出し、そのまま固まって山をなしたものであり、この地震に誘発され眉山の東斜面が大崩壊を起こしました。これにより、大量の土砂や溶岩が島原を埋めつくし、島原住民の7,000人が犠牲となりました。

崩壊による土砂は島原の南地区を埋め、さらに海まで流れ有明海に流入しました。有明海に流入した土砂は、大きな津波を引き起こし、島原半島側及び対岸の肥後（熊本）側にも大きな被害を及ぼしました。これが、『島原大変・肥後迷惑』とされています。

■長洲町における被害

この一連の災害による死者は、約15,000人とも言われています。その内の約5,000人は、天草諸島を含む熊本県の沿岸での津波による死者でした。

	長洲町	清源寺	平原	上沖洲	腹赤	合計
死者(人)	542	405	36	433	7	1,416
流出(軒)	766	285	39	450	0	1,540
死馬(頭)	20	30	10	18	0	78

〔長洲町史より〕

清源寺の清正公神社の石段の上から2段目（8.6m）まで津波が来たと言われています。また清源寺に住む西川安太夫と言う侍が豪壮な屋敷を構えていましたが、家・蔵とも流出し、津波到来時に屋敷内にいた15人が亡くなったと言われています。

上沖洲の名石神社では、社内にある銀杏の大木（現在はご神木）の枝につかまり、命が助かったと言う記録があり、この時の津波の高さは、6m～8mと言われています。“この時の津波で上沖洲に残ったものは、銀杏の木、名石神社の鳥居、古川小源太の蔵1つが残り、あとは家1軒も残り申さず”との記録が残っています。



清正公神社の石段の上から  
2段目まで津波が来た



名石神社内にある銀杏の大木  
(現在はご神木)



【碑高 1.25m】



【古墳改葬之碑】

古墳改葬之碑

ごふんかいそうのひ  
寛政3年（1791）  
10月18日（新暦11月3日）島原半島で地震が起こりました。地震は、その後も続き、回数も増えてひどくなっていきました。翌年、4月1日（新暦5月21日）午後八時ごろ、強烈な地震が二度起こり、眉山が大きく崩れ大量の岩石や土砂が有明海に流れこみました。そのため、有明海沿岸には、津波が押し寄せ、当時の  
たまなぐん  
玉名郡でも、およそ2,200人程の方が亡くなり、島原大変・肥後迷惑と言われます。この時、亡くなった旧長洲地区の人達は、長洲小学校のところにあったお寺の墓地に埋葬されました。その後、明治45年（1912年）に福岡春三さんや地区の方々の尽力により新山墓地に移され、さらに昭和14年（1939年）に磯田大吉さん夫妻の尽力で、この碑が建てられました。

あまくさそうなんしゃひ  
天草遭難者の碑

■ 当時の漁民遭難のようす (明治26年10月12~13日)

(『町民の長洲町史』前田哲之助著より)

明治26年当時の新聞によれば、旧長洲町の住民戸数は1,300軒余り。その内漁業を以て生活する者は実に800軒余り、住民の60%以上が漁民だった。10月中旬の頃は、アミの漁獲期で、12日は4~5隻の船が出て大漁であった。翌13日も町内総出で微風雨ではあったが午後2時過ぎより続々出航した。その数190隻、380人。

翌14日の午前1時頃になり、風は止むどころか逆に急にひどくなったため網や錨を切り、長洲や島原に避難しようとしたがそれもままならず、多くの船は流されたり転覆してしまった。海に投げ出された人たちは流木等を見つけ漂流しようとした。しかし、それもできない人は波にのまれ海のもくずとなり、各地の海岸に死体となって打ち上げられた。生きて漂着した人は僅かであった。長洲の海岸に生存して漂着した数は11名という記事もみられる。

■ 長洲町以外 (上天草市) の記念碑 (『町民の長洲町史』前田哲之助著より)

長洲漁民の死体が流れ着いた上天草市 (元大矢野町) 上地区の串と白涛に記念碑が建てられている。

・串地区の供養碑

明治26年12月29日 長洲漁民溺死者之塚 天草郡登立村 双原 井出龍五郎

・白涛の墓 (海岸より南の小高い山の中腹に地区の墓地と同じ敷地に建てられている)

明治26年10月 長洲漁夫之塔暴風雨溺死漂流者12名之墓

ここまで、遺体を運ぶのも大変だったろうと思われる。大矢野町にはこのように碑を建てて頂いているが、三角半島北岸の村々の方々には、生きて漂着した人のお世話や遺体の収容など、当時の状況を新聞記事で知ることができる。この地区の方々への感謝の念を忘れてはならない。

■ 上天草市大矢野町の串地区・白涛地区を訪問

長洲町では、毎年2月、上天草市大矢野町の串地区と白涛地区を町関係者が訪問し、現地に建てられた供養碑と墓石へのお参りを行っています。その後、地区の公民館で地元の方々と当時のことを忍びながら交流を行っています。当時、海難者が打ち上げられたという串地区の海岸は、集落から丘陵の急な坂道 (小道) を歩いて20分程のところであり、大小の石がころがった小さな海岸部です。そこから、長洲町の方向を見ると、目の前に有明海が広がり、その向こうに島原半島を一望することが出来ます。



漁民が打ち上げられた串地区の海岸



串地区の供養碑



白涛地区の墓石



【白涛地区にあったものを移設した供養碑】



【海難碑】  
(碑高3.75m、石積式六角)

海難碑

明治26年(1893年)

10月14日 漁に出た多

くの人が遭難し亡くなり

ました。このことを後世

に伝え、死者の冥福を祈

るために、321人の名

前が刻まれた碑が『海難

碑』です。当時、長洲町

には、800戸余りが

漁業を営み、アミ漁が

盛んでした。記録には、10

月12日の漁は大漁だった

とあります。このため、翌

日は風雨で多少天気が悪

かったにもかかわらず、

190隻の漁船が漁に出

ました。ところが14日の

真夜中、午前1時頃、急に

天候が悪化。漁に出てい

た人たちは港に引き返そ

うとしましたが、海は台

風のように荒れ狂い、ほ

とんどの船が沈没してし

まいました。この時助か

った人はわずか50人余り

でした。遭難者の多くは

有明海沿岸の各地に打

ち上げられました。その

中で上天草市の串、白涛

地区には遭難碑が建て

られ、毎年供養が行われ

ています。



**明徳碑**  
町の有形文化財の中で、一番古いのがこの明徳碑です。南北朝時代末期の明徳2年（1391年）に建てられたものです。四面の石2個・丸型の石2個が積んであり、町民のあいだでは「がらんさん」という名称で親しまれ、地域の人々に大事に保存されています。下から2番目の四角の石まわりの四面に、法華経が彫ってある宝塔です。死後の安楽と平和

**がらん**  
大きな寺や僧が集まり修行する場所。  
**宝塔**  
仏教の信仰のために建てられた石の塔。  
**南北朝時代**  
建武3年（1336）から明徳3年（1392）までの室町時代初期の57年間。

を願ったものとされています。  
この碑は、六地藏石幢の隣にあります。（みんなの蔵の前）



【救援隊並びに遭難者之碑】  
（碑高1.5m、自然石）

**救援隊並びに遭難者之碑**  
明治28年（1895年）6月3日、22人の漁民が出漁中、突風による遭難のおそれがありました。そこで、18人の漁民が救出に向かいました。しかし暴風雨はさらに強くなり、出漁中の漁民の救護に向かった漁民のうち7人の若者は、暴風雨による波浪には勝てず、帰らぬ人となりました。

**亡くなられた7人の方々**  
松本伍一、松本万太郎  
福島大松、松本亀二郎  
浜本松造、山岡末太郎  
松浦折助

町の人々は、この若者達の崇高な精神をたたえ、22人の人々と共に冥福を祈ってこの碑を建てました。  
その場所は、新山の墓地内にある海難碑、古墳改葬之碑の北側、かごしまほんせんぞ鹿兒島本線沿いにあります。

# 破魔弓祭

## (的ばかい)



【藁で編まれた的】

永暦元年（1160年）筑前の国三笠郡四王寺嶽（26頁を参照）から、日本武尊の御神霊が長須村須崎の浜の岩屋（金魚と鯉の郷入口付近）に御来現され、近くに高御座（洲崎神社）を設けておまつりしました。

その後、社殿遷座の儀が起こり、宮司が放った矢の先が立った所を神地と定めて、御神体をその場に移しました。その時、御神体を運んだ円座を氏子達が、除災、延命等の御利益を得ようと、奪いあつたのが、的ばかいの起源とされています。

的ばかいには、4つの祭事があります。的献納祭では、的を先頭に行列を作つて四王子神社に奉納します。三射の儀では、藁の的と紙の的に矢を三射して御神託を行います。的投与祭では、締め込み姿の男衆が的を神殿から奪い出し、的

の海中でしばらくもみ合います。最後の的頒布は、潮水で清められた的を小さく切り分け、除災招福と家内安全を守護するとして、家庭の神棚に供えられます。

**日本武尊**  
古代伝説上の英雄。  
**御神霊**  
たましい。霊。  
**円座**  
ワラなどで作った丸い敷物。  
**御神託**  
神様のお告げ。

## 《編集》

- 長洲町文化財保護委員  
山本孝範、松下 進、隈部壽明、水町恵子、野畑幸子
- 長洲町教育委員会 生涯学習課  
〒869-0123 熊本県玉名郡長洲町大字長洲 2772-2  
電話 0968-78-0053  
E-mail : skyouiku@town.nagasu.lg.jp



令和 2年（2020）11月発行